巻　頭　言

宇宙航空研究所は，1966年以来すでに6年間にわたり全国共同研究事業である大気球観測実験を担当して来た．この事業の将来計画ならびに毎年度の実施計画の基本線は関係専門分野の代表により構成される大気球専門委員会が決定し，その実行を宇宙研の気球グループ(気球部門，観測部気球班，その他）が担当している．

このような組織の下に大気球観測事業は極めて円滑に運営され，これまで大小182機の気球を放球し，各種の科学観測において多大の成果を挙げている．また，科学観測側の要求に応じて高性能大型気球ならびに附属機器の開発が着々と進められ，気球の最大容積で言えば現在すでに10万立方メートルのものが実用の域に達し，さらに20万立方メートルを目指して開発研究が行なわれている．

気球観測事業において得られた学問上の成果は，毎年1回宇宙研の主催する大気球シンポシゥムで一応報告された後，再検討を加えて論文となり，宇宙研報告大気球特集号や各専門分野の学会誌などに発表されている．この特集号には，1971年度より活動を開始した三陸大気球観測所(S. B. C)に関する報告2篇，気球ならびに附属機器の開発研究関係論文8篇，および，科学観測と観測機器に関する論文6篇，合計16篇を掲載する．科学観測の成果は専門学会誌に発表される場合が多いから，ここに掲載するものがすべてではないが，本特集号によって大気球観測事業の活動状況を理解することができよう．

1973年2月

大気球専門委員会
委員長　河村龍馬

This document is provided by JAXA.